

郷

のストーリー



左から 室川典弘さん、石井理永蔵さん、富塚誠さん



農事組合法人「長生フロンティアファーム」代表理事

石井 理永蔵 さん

●プロフィール

1973年生まれ。農業の企業化と、一宮町が千葉県のトマト栽培において、リーダーシップを執ることを目指し、仲間と共に農事組合法人「長生フロンティアファーム」を設立。代表理事を務める。

トマト栽培に最新鋭の設備を導入し 若者が働きやすい環境を目指す

「農業を志したきっかけ」

現在、一宮町で大胆な農業改革に取り組んでいる人、それが、農事組合法人「長生フロンティアファーム」(以下、フロンティアファーム)の代表理事、石井理永蔵さんです。

実家が農業を営み、現在も父親がトマトやメロンなどを栽培しているという石井さんは、小学生の頃から自分も将来は農業の道に進むのだと、何の疑いもなく考えていました。

そして大学卒業後、農業実習のために一年間アメリカに留学し、帰国後すぐに就農。その当時から、持ち前の自由な発想と行動力で、農業の枠にとらわれず、様々なことに関わってチャレンジし、その経験を通じて視野を広げられました。

「目指すは『農業の企業化』！」

そんな石井さんが、農業の後継者不足を解消する対策として、いま、新たなチャレンジに取り組んでいます。

「なぜ、若い人たちが農業をやりたいがらないのか。私が考える一番大きな理由は、ズバリ、儲からないからです。」と石井さん。事実、野菜類は肉などに比べても生産性が劣り、単価も低く、収益は上がりにくい。

そこで、安定した経営基盤を確立させ、見込み通りの収益を得るためには、どうすれば良いのかを考え抜いた石井さんは、「農業の企業化」という結論を導き出しました。

そして、その構想を実現するために仲間と共に立ち上げたのが、フロ

しっかりと軌道に乗せたあと、さらなる規模拡大を目指すこと。現在のハウス面積は約3000坪ですが、5000坪まで拡大し、将来的には、千葉県のトマト栽培でリーダーシップを執りたいと夢を膨らませています。

さらに、「農業の企業化」という目標を達成するために、就業スタイルをより一層、一般企業に近づけていくこと。そうすることで、様々なルールが確立し、会社で働くイメージで農業に従事することが可能になるため、若い人が入りやすく、働きやすい環境が整えられると石井さんは考えています。

全国的にもそうであるように、一宮町にも押し寄せている高齢化の波。高齢者が元気に働いている姿を見ると、とても頼もしく思うとともに、若手や後継者が少ないことには、大きな課題を感じる側面も。

「だからこそ、農業の企業化を推進することにより、若手不足の現状を打破することこそが、フロンティアファームの大きな役割の一つであり、存在意義なのです。」と、力強く語ります。

また、フロンティアファームでは従業員だけでなく、実習生も受け入れているとのこと。フロンティアファーム周辺は、高齢化により空きハウスが増えているため、2年間の実習期間中に新たな技術と人脈を手にした後は、その空きハウスを使って独立し、経営者を目指してもらおうというシステムも用意されているそうです。

ンティアファーム。「開拓者の精神で挑戦し続け、前に進み続ける」というイメージで、「Challenge For The Future」という副題を掲げています。

「トマト栽培にハイテクを導入！」

フロンティアファームは、6年前石井さんの実家が所有する土地に建てた、一棟のハウスからスタートしました。

低コストの耐候性ハウスを使った、トマトの水耕栽培事業。そして、このハウスこそが「農業の企業化」の重要な鍵となります。かなり大型ではあるものの、一見すると、ごく普通の農業用ハウスですが、実は、温度、湿度、さらに二酸化炭素などを、トマト栽培に最適な環境にコントロールできる、最新鋭のシステムを導入しています。

このため、限りなく自然環境に左右されないトマト栽培が実現。一年間で3回の収穫が可能になり、初年度から一反歩あたりの収量が、年間約30トン超を記録しました。長生管内の平均的なトマトの年間収量が約25〜26トンのため、大幅アップといえます。

石井さんはこれらの成果とデータを手に、5年間かけて周囲の仲間にも「一緒にやろう！」と声を掛け続け、2015年7月、遂にフロンティアファームを設立。「農業の企業化」への第一歩を踏み出しました。

「千葉県のトマト栽培でリーダーシップを執る！」

今後の目標は、まずこの事業を

「つながりを大切に、 若者が根づく町づくりを！」

現在、一宮町の産業の柱となっているのは農業と観光。もし、この二つの分野が連携し、新しい何かを生み出すことが出来れば、一宮町をさらに活性化することができると感じている石井さん。将来的には、フロンティアファームで観光農園なども展開していきたいと考えているとのこと。実現すれば、一宮町の農業と観光をつなげるきっかけを作ることができ、さらなる活性化へとつながっていく。そんな未来を期待したいと語ります。

2020年に開催される東京オリンピックの影響もあってか、近年移住者が増えている一宮町。

石井さんは、今後、フロンティアファームの規模を拡大し、より多くの雇用を生み出すことによって、若者たちが町に根づき、生き生きとした未来を創ることの一助になれば嬉しいとも語っています。

実際、サーフィンを目的に一宮町に移住し、フロンティアファームで働いている人たちもいるとのこと。

「東京オリンピックが契機になり、フロンティアファームでつながったサーフィンと農業。そこからまた新しいつながりが生まれ、より元気で活気ある町へと発展していく。そんな一宮町の未来を築きみに頑張っていきたいです。」

トマトも、一宮町の未来も、共に育む。それが、フロンティアファームの事業なのかも知れません。